篠原勝之（KUMA）さん追悼

塔頭清涼院住職　森本公穣

初めて篠原勝之さん（以下、KUMAさん）にお目にかかったのは、二〇〇四年の修二会の時でした。旧知の県庁職員Tさんから、「KUMAさんがお水取りを見たいと仰っているので、空いていたら公穣さんが案内してくれませんか？」とお声掛けがあったのです。KUMAさんは一九八〇年代、坊主頭に粋な着流しと派手なマフラーに下駄という出で立ちで『笑っていいとも！』などのテレビに出演しておられ、私もよく存じていた「ゲージツ家」でした。

その年はちょうど練行衆から外れていたのでご案内役を受けることにし、約束の時間にお待ちしました。到着されたKUMAさんはテレビで見ていた通りの人懐っこい笑顔で、ニコニコしておられました。そして、仏教に大変興味を持っていることや、若い頃にはインド哲学者の松山俊太郎氏に唯識を学び、「いつか、華厳を読むとイイ。理解しようとせずとも、ただ何度も何度も読んでいると分かってくるよ」という言葉を受けたこと、その導きもあって今日、華厳の東大寺に辿り着いたことなどを話してくださいました。

早速、お松明を見学していただき、その後、堂内に移動して行法の様子をご覧になること約六時間。慣れている我々と違ってきっと寒かっただろうと思いますが、終わってKUMAさんは「住職、これはもうオペラじゃねえか。いや、もう仏教オペラだな」と感想を述べられ、「ゲージツ家」として何かを得られたように見えました。それが、KUMAさんとの二十年余りのお付き合いの始まりでした。

修二会が終わり、奈良に春が訪れて少しした頃、二度目の出会いがありました。「古都奈良の文化財」がユネスコの世界遺産に登録された翌一九九九年から奈良公園で真夏に開催されていた「なら燈花会」に、KUMAさんが蚊帳を素材として制作される「ひかり繭」というオブジェが展示されることになったのです。その打ち合わせで奈良にお越しになるから会わないかと、なら燈花会の会会長だった朝廣佳子さんからご連絡を受けてのことでした。当時、私はなら燈花会の会会員でもあったので、喜んで待ち合わせ場所に向かいました。KUMAさんは最初と同じ人懐っこい笑顔で、「これからな、ちょくちょく奈良に来るから、まぁ、よろしくな」と仰いました。

制作中の「ひかり繭」はどうやらかなり大きいもののようで、KUMAさんは「公穣住職、出来上がったらな、せっかくだから大仏さんのな、左手の上に置いてくれねえか？」とも仰いました。さすがにそういう訳にもいかないので、代わりにご自身が大仏さまへ乗っていただくこととし、八月七日の「お身拭い」で左手のお掃除を担当していただきました。元々、鉄の作品を制作されていたことからか、銅で鋳造された大仏さまのお身体を愛おしそうにお掃除されていたお姿が印象的でした。



暫くして出来上がり、奈良公園の木に吊された「ひかり繭」は確かにかなり大きなもので、燈花会の無数のろうそくの明かりに照らされて仄かな明かりを放っていました。しかし、燈花会は僅か十日間のイベントで、いずれ最終日がやってきます。常設を前提とした素材で制作されている訳ではなく、最終的には解体される運命ですが、この後暫くは東大寺が運営する東大寺学園幼稚園に移設され、園児たちに蚊帳とヒカリの優しさを届けてくれました。

東大寺には幼稚園とは別にもうひとつ、子供たちのための施設があります。社会福祉法人東大寺福祉事業団が運営する、障害児施設「東大寺整肢園」（現・東大寺福祉療育病院）です。当時、整肢園には肢体不自由児と重症心身障害児合わせて六十名余りが入所していました。その頃、福祉事業団の常任理事だった私は、こういう世界を一人でも多くの方に知ってもらいたいと思い、知り合った人々を次々とここに連れて行きました。KUMAさんもそのお一人でした。ただ、重い障害を持った子供を初めて間近で見る人も多く、そういった方々の多くはどう対応したら良いのか分からず、例えば最初は身体の前にあった両手も、不思議なことにいつの間にか後ろで組むことになってしまうのです。しかし、KUMAさんは違いました。あの人懐っこい笑顔で子供たちの前に立つと、子供たちも何か一生懸命に話しかけようとするのです。その時のことをKUMAさんはこのように記されました。

「過ぎ去った奈良での場面を思い浮かべていた。曲げた頸の上に少し引きつれたような笑顔を載せた幼児たちは、巧みに車椅子を操りながらオレを取り囲んだ。一瞬の戸惑いを見透かしたように、直角に捻れた小さな掌頸で、オレの手を掴んだ。懸命になにかを言っている。彼等の不自由な口から漏れてくる関西弁らしい小さな声を、聴き取れなかったのはオレの左鼓膜が喪失していたからだ。



「今度いつ来んの」。なんとか聴き取れたけど先のコトなぞ分からない。きっと寒くなる頃また来るとだけ答えて手を握りかえした。彼等は、今までこの質問を何度繰り返してきたのだろうか。

頭蓋骨をヘッドギアで保護した車椅子の車輪ほどのしかない少女が、椅子の隙間を縫うように走ってきた。コトバはなくオレの指先にぶら下がり舐めだすじゃないか。汗ばんだような柔らかい感触はムカシに覚えがあった。親鳥の留守にこっそり登って手を伸ばして鳥の巣に突っ込んだ。指先に当たった孵ったばかりのヒナの温もりに感じた〈生命の一員〉に似ていた。彼女の『今度いつ来んの』に想えた。東大寺が運営する〈整肢園〉を訪れたときのひとときだった。」



KUMAさんから子供たちに「虹しるべ・風しるべ」というヒカリを感じる二つのオブジェが届いたのは、それから約二か月後のことでした。四国で切り出された石から作られたそのオブジェのひとつは、「光」という字の上に三角形のプリズムが載せられ、太陽の光を受けると壁に虹が出来る仕掛けになっていました。

もうひとつは背が高いもので、丸く空けられた穴の部分に風鈴のようなものが吊され、風を受けると音が鳴るウインド・チャイムでした。「虹しるべ・風しるべ」の名前の通り、入所する子供たちにヒカリを届け、自然を感じられる優しさに満ちたプレゼントでした。







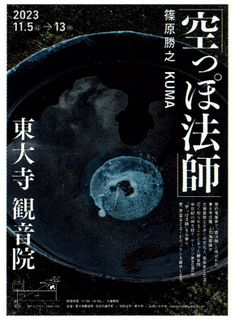
またある時、長老が育てていた蓮の鉢植えを整理することになったのですが、その話を聞かれたKUMAさんは「公穣さん、その蓮、勿体ないから俺にくれるよう、長老に頼んでくんねえか」と言ってくれました。そして、旧知の県庁職員Fさんに頼んでわざわざトラックで山梨のアトリエまで運び、そこに池を作り、育ててくださいました。そしてそれ以降、毎年開花の度に「公穣さん、今年も咲いたよ」と写真で報告してくれました。



その後、二〇二一年にはアトリエを奈良へ遷されましたが、それらの蓮は奈良から山梨に行って花を咲かせた後、また奈良に戻って咲いたのです。蓮を育てられたのは初めてだったそうですが、KUMAさんの愛情が美しい花を咲かせたのでしょう。

二〇二三年の秋からは、法華堂横にある観音院で個展を三度開催されました。沢山の器が並べられましたが、それは山梨のアトリエを処分される際、池の底にあった粘土で作られたものでした。そう、あの蓮を抱いていた池です。その土に指を指して「空っぽ」の空間を作り、そこから観音さまを念じて制作されたとのことでした。







二〇二四年の会場には、釉薬の色が変化して虹色のヒカリが現れたという六つの器も「六観音」として出陳されていました。

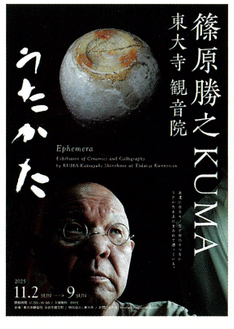
二〇二五年には器だけではなく書も沢山出陳され、回を重ねる毎に多くの方々で賑わいましたが、KUMAさんは国内のみならず海外からの来訪者にも積極的に話しかけられ、豊かなコミュニケーションでおもてなしをされていたのが非常に印象的でした。

そして、もちろん今年も四回目の個展を開催していただくつもりで、KUMAさんご自身も作品を制作しておられましたが、惜しくも四月十七日、肺炎のため八四歳で逝去されました。心よりご冥福をお祈り致します。十一月一日（日）から八日（日）には、回顧展が観音院で開催されます。ぜひ皆さま、最後の作品をご覧になってください。











篠原勝之回顧展
『KUMA』
令和八年十一月一日～八日
東大寺観音院

KUMAさん、長い間どうもありがとうございました。また逢いましょう。

多謝　合掌